



228号
2017 / 11 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方
☎044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



「山椒の実を摘む」 陝北の人々は花椒の香りを好むので、どの村にも大きな山椒の木がある。時々通りかかった黄河畔の村で、二人の少女が無心に山椒の実を収穫していた。2002年秋、陝西省延川県土崗郷小程村にて
撮影・周路

又しても、孔子の弟子に関するお話です。植田先生の論語のお話の近くに載せて頂くのは、ちょっと気がひけますが、中国の小さい子供向けの本の中に出て来るお話ですので、弟子たちの説明なども、少々の違いはお許しいたできます。

「孔子には、二人の愛弟子がいました。一人は顔回、もう一人は子貢と言いました。

ある時、齊の国が魯の国(孔子の故国)を攻撃しようと準備を始めた時、孔子は魯の国の窮状を救うために、直ちに子貢を魯に派遣しました。子貢は、孔子に仕事を命じられたことを光栄に思い、東奔西走して、周りの国々と交渉を重ねて、魯の国を重大な危機から救いました。

しかし、孔子の目には、子貢と顔回を比べると、まだまだ大きな差があるように見えるのでした。それで、孔子はわざと子貢に訊ねました。『お前と顔回では、どちらが賢いと思うかね?』すると、子貢は礼儀正しく答えました。

『それは、顔回先輩が、私などよりずっと賢いに決まっています。先輩は一を聞くと、十のことにまで考えが及びますが、私などは、一を聞いて、やっと二のことに思い至るだけですから』

と答えました。孔子は、それを聞くと大きくなすきながら、

『私もそう思うよ。(顔回は本当に賢い)』

と言うのでした。

意味の説明は、「ほんの少しのことでも知ると、そこからとても多くのことを理解することが出来ること。類推する能力にたけていることの形容。」となっています。

例文は、「劉さんは、とても優秀な警察官で、長年の経験から、一を聞いて十を知る類推の力を発揮して、多くの難事件を解決へと導いている」と出ています。

この言葉は、日本でも、そのものズバリ「一を聞いて十を知る」として、よく使われる言葉です。6月号で紹介した「举一反三」(物事の一角のことを聞いたら、残りの三角を類推して、物事の全容を理解するべきだ)と同

じように、孔子にまつわるお話ですが、先に出て来る「举一反三」より、今回の「聞一知十」の方が、ストレートで分かり易いですね。どうして「举一反三」の方が先に出て来るのでしょうか。

何れにしても、4・5歳の幼児向け本に、いくら名門小学校「お受験」用の本だと言っても、このような言葉が次々と出て来るのには驚かされます。日本の「お受験」の経験は無いのですが、このようなことは教えないだろうと勝手に想像して驚いています。

中国は文字の国で、文字一つ一つに意味があるので、文字を教える時には、バラバラに教えるよりも、四字成語のようにしっかり組合わさって、ストーリーのあるものの方が教えやすいのでしょうか。それにしても、教育対象となる幼稚園児と、言葉の意味の深さのギャップには驚くばかりです。

今回のお話に出て来る孔子の弟子は、顔回と子貢ですが、二人とも、弟子の中で優れた十人という意味の「十哲」に数えられています。顔回

は、孔子が自分の後継者にと考えたほど優秀な弟子でしたが、32歳の若さで死んでしまい、孔子に天への恨み言を言わせています。それほど期待していたのでしょう。また、子貢は弁が立ち、史記や春秋左氏伝などの歴史書にも、外交の面での活躍が記載されているようで、今回のお話もそんな中で語られています。

ネット上には、孔子はもとより、沢山いる弟子たちの名前や、性格、何をしたかなど、事細かに出て来ます。孔子と言ひ、その弟子たちと言ひ、ざっと2500年も前の人達のことがこんなに詳しく語られるのは、やはり、中国が文字の国で、記録が好きな民族だからでしょう。

お陰で、隣国日本の様子が中国の歴史書に記載され、大事な研究資料になっているばかりでなく、我々一般の人間も、中国の長い長い歴史の中の出来事を、お話として楽しむことが出来ているのです。文字とは、本当に有難いものです。



Mín kě shǐ yóu zhī
民可使由之

民は之に由らしむ可し〈泰伯第八〉

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



『論語』には、これまで誤解され続けてきたと思われる言葉が幾つかあります。その一つが表題の一節です。この後に「不可使知之 (bù kě shǐ zhī) (之を知らしむ可からず)」が続きます。「由らしむ」とは、信じてついて来させることです。「之」とは何を指すか、この章句だけでは、はっきりしませんが、ここでは政策とか政治手法を指すと考えられます。「知らしむ」とは、知らせること、又は理解させることです。「民」とは民衆です。したがってこの意味は、民衆というものは、当面の政策課題に関して、信じて従わせることはできるが、その意味内容を理解させることはできない、更に言えば、民衆とは、無条件に従わせるべきものであって、政策の内容など知らせるべきではない、ということにもなります。

しかし、これでは専制主義、隠蔽政治の肯定ということになりかねません。専制主義をあからさまに肯定し、奨励する人は、さすがに現代の民主制国家では少数派になりましたが、隠蔽政治は今も存在します。そこで隠蔽政治の悪例として、この一節を持ち出す人は少なからずいます。「情報は公開しなければならぬ。由らしむべし、知らしむべからず、ではいけない」「由らしむべし、知らしむべからずの政治手法は改めなければならぬ」等等。

孔子は、はたして専制主義や隠蔽政治を奨励したのでしょうか。ここで問題となるのは「不可」の意味です。訓読では一般に「べからず」と読みます。これを国語辞典で調べると、「～してはいけない。禁止を表わす」とあります。一方、古語辞典には「～することができない。不可能を表わす」とも併記しています。禁止と取るか、不可能と取るか、ここで意味は大きく変わってきます。前者は、「知らせて

はいけない」となり、後者は「知らせてくても知らせることができない」となります。

ところで、「べからず」という表現はもともと日本語にあったものではなく、中国の古典を読み下すために作られたものです。古くは不可能の意味で使われることもありましたが、後世では禁止の意味で使われる方が圧倒的に多くなりました。一方、中国古典の用法では、禁止の意味で使われることもないわけではありませんが、不可能の方が主流です。誤解は恐らくこういう所から生じたものかと思われます。

孔子は混乱した社会秩序の安定回復のために、身分制度を重んじましたが、一方では、望む者に対しては身分の分け隔てなく教育を施しました。「自行束修以上、吾未嘗无诲焉 (Zì xíng shù xiū yǐ shàng, wú wèi cháng wú huì yān)」(束脩を行うより以上は、吾未だ嘗て誨うる事無くんばあらず)〈述而第七〉。少なくとも最低限の謝礼を払って入門した者には、教えることを断ったことがない。これが孔子の教育信条でした。教育を受けたことの無い人、たとえ被差別地域の出身者であっても、知識を得たいという志のある若者を排除することはありませんでした。

しかし当時の社会状況を考えれば、運よく教育を受ける機会に恵まれた人は、ほんの一握りに過ぎません。民衆のほとんどは教育とは無縁でした。これだけは孔子一人の力ではどうにもならないことでした。とは言え、世の指導者たるもの、そういう民衆に対しても応分の責任を負わなければならない。そのためには無知の民衆からも信頼を得られるよう行動しなければならない。孔子の言葉にはそういう思いが込められているとみるべきでしょう。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

今回の旅行は、従来に増して目的の多い旅である。これまでの3回の連載で、①友人の娘さんの出産に際し、頼まれた粉ミルク・哺乳瓶などを渡したこと。②長年の懸案であった「千山」への登頂と「千山弥勒大仏」。③世界一長いという水路を持つ鍾乳洞見学——について紹介したが、4回目となる今回(5月13日)は二つの目的があった。一つは、大連での2年間そしてその後の大連訪問でも話題にも上らず、知らなかった「営城子漢墓」を見学すること。(これは一昨年友人のMさんから資料を頂いて初めて知った) もう一つは、老虎会のKさんからの依頼である。老虎会とは、大連で生まれ終戦時現地の日本の小学校・中学校に通っていた人達の集まりである。私も大連に縁があると言うので入会を認めていただいた。老虎とは、言うまでもなく年老いた虎ではなく(会員は全員70歳以上の老人であるが)大連市の海辺に老虎灘という観光名所があり、それを会の名称としたのである。

依頼の内容は、戦前大連市内に③を除き日本人が設計・建築したと思われる有名な建物の現状について、今年大連に行かれるなら何とか調べてもらえないかということである。依頼の建物は次の4つでこれらの資料も頂いた。

①星が浦ヤマトホテル

ヤマトホテルは満鉄が経営したホテルチェーンの名で、中山広場に現存する大連ヤマトホテル(現在大連賓館・設計者は太田毅)が有名である。東北地方にいくつか(長春・瀋陽・旅順・ハルピンなど)建設された。このホテルの場所は市内の星海公園(昔はこの辺りを星が浦と呼んだ)付近。設計者は不明。

②満鉄総裁邸

市内沙河口区黒石礁付近。資料では第14代総裁を務めた、あ

の松岡洋右邸とある。設計者は不明。なお初代総裁の後藤新平邸はロシア風情街の奥にある旧大連市役所(この建物は1907年から1年間満鉄本社・満鉄設立は1906年11月)のそばの満鉄総裁公邸。

③双葉学院

アメリカ人建築家・ヴォーリズの設計。1939年竣工。市内中山区青泥街付近。

④浪速寿司

大連を代表する建築家・横井謙介の設計による洒落た3階建ての建物。1935年竣工。1階が浪速寿司である。市内中山区友好広場付近。

私は歴史好きなので、Kさんの依頼を二つ返事で請け負った。資料の写真はどれも素晴らしい。状況は後述したい。

さてまず「営城子漢墓」から紹介したい。「営城子」とは(その1)に書いたように大連市内から北西の渤海湾沿いにある町の名前である。友人のMさんが漢墓があることを知ったのは、1992年に語学短期留学した大連にある「大連外国語学院」のテキストである「中級漢語課本」からであった。その第1課が「営城子漢墓」である。Mさんは興味を引かれたようであるが、当時の旅順地区は外国人に開放されておらず営城子に行くことが出来なかったという。(営城子の所在地はわんりい225号の4頁に記載)

その後解放され、多くの資料を集めて漢墓についての小冊子を作られ、私も一部頂いたというわけである。ともあれ大連は19世紀末にロシアが街づくりを始める前は農漁村で、今でこそ大連市は大きい顔をしているが歴史に書かれてからまだほんの120年余りであるのに対し、営城子周辺は2千年前後の記憶すべき歴史があったと言えるのではないかと、いずれにしても同学院



「営城子漢墓」の管理人と筆者



大連漢墓博物館 (百度百科から)

がこの地方の歴史を大事にしていると言えよう(この漢墓に関する民話も記載されている)。留学生用の教科書にまで載っているのであるから。念のため大連にいる中国人の友人の何人かに聞いたが、知っているとの返事は残念ながら一人もなかった。大連は、街が綺麗で住みよいし、どんどん発展していると皆は言うけれど、このような歴史や民話を知ってこそではないだろうか。ちなみに老虎会の集まりで漢墓を知っているか聞くと、半数近くの方がご存知で現地に行ったことがある方もいた。

宮城子漢墓の場所は事前に調べてほしいと伝えてあったので、9時半頃に彼らのマンションの近くで合流し、友人の娘婿の車で4人で出発した。まず「大連漢墓博物館」に行くと言う。それは漢墓遺跡に隣接する場所にあった。白い長方形の建物だ。中はいろいろな展示物や出土した土器や銅製品がたくさんあった。友人たちはさっと見て、車で待っているという。昨年大連郊外の金州からすぐのところにある歴史遺産の烽火台(わりい219号参照)を探すときもそうであったが、地元の多くの人達は自分たちの住む街の歴史に関心を示さず外国人の我々が関心を持つとはどういうことか!と言いたいが得てしてこんなものであろう。私は車に乗り込みすぐ近くの漢墓の正門前に車を停めてもらった。2人は車で待っていると言うので、私と友人とで買祿のある木製の門の脇のくぐり戸から中に入った。

さてここで漢墓の説明をしよう。この漢代の墓は、旧満州国時代の1931年に日本の「東亜考古学会」によって発掘された、今から約2千年後の後漢時代

(AD25年~220年)の遺跡である。つまり日本人が発見したのである。そして生き生きとした壁画で有名となった。今でこそ中国国内では後漢時代の壁画墓がいくつも発掘されているらしいが、この宮城子の壁画墓は中国で初めて調査された漢代の壁画墓であるため、中国考古学の歴史研究における重要な遺跡らしい。宮城子漢墓は、写真のような民家の庭に建てられた平屋の建物の地下にある。地下には、主室、前室、後室などがあり、これらの墓室はレンガで積み上げられ主室の天井は二重構造になっているという。そして主室の奥壁には墓主の昇仙図と一人の従者を従えている壁画があるらしい。「らしい」と書かざるを得ないのは、中に入らせてもらえなかったからである。この墓は当時の洛陽あたりで流行した墓の構造であるらしくそれが遠く遼東半島のこの地にどのようにして伝わったのであろうか。どのような文化交流があったのであろうか、それとも皇帝の遠征による戦でもあったのか、興味深い。

大連の中心部から北に少し行ったところに、ひと昔前はこの地方の行政・軍事の中心であった「金州」という町があるが周辺で漢代の城が発見されている。研究によれば、宮城子漢墓は金州にあった城の住民の墓地のようである。つまり金州から少し離れた田舎に住民たちの墓を造ったのであろうか。とすれば主室の墓主は、この城の主であったのではなかろうか。ちなみに宮城子漢墓から200メートル離れたところに1999年に発掘された「沙崗子農家院漢墓」があるが更なる研究成果を待ちたいものである。

話を戻すと、くぐり戸から中に入ったところ、そこに墓地の管理人がいて友人から「この人は遠く日本から来たが、壁画を是非見せてやってほしい」と頼んでもらったが、残念ながら断られてしまった。仕方ないので私は管理人にあれこれ話をしたところ、打ち解けてきてこの墓の説明をしてくれた。60歳と言ったが日本人が発掘したこともよく知っていた。いくつか写真を撮った後、握手をして別れた。

4人で市内に戻り、引き続き老虎会のKさんに頼まれた建物を探しに出ることにした。紙面の関係で以下は次号に譲りたい。

(続く)

▶ 享年67歳 早すぎる死

ローマから中近東、アジアを旅して1969年4月初め、東京に戻った私は伊東三郎の死を知りました。年譜を見れば、「1969年(昭和44年)67歳1月、健康を害して病臥中、身近に東大闘争起り、事態の重大さを深刻に考える。2月28日発病、氷川下セツルメント病院に入院、3月7日午後10時20分死去。9日、本郷の自宅にて葬送」と記されています。

68年の夏、新潟港から船でナホトカに行き、ヨーロッパに旅立った私でしたが、上野駅のホームまで見送ってくれた伊東でした。その時は、東大闘争や、ましてや日大闘争があのように大きく盛り上がることなど予想もしませんでした。

享年67歳とあります。当時20代半ばの私から見ると、伊東はもっと老成しているような感じでした。しかし今思うと、67歳というのは若すぎるように思います。まだまだ生きていてもおかしくない年齢です。

伊東の愛弟子である阿部祈美は、帰国後すぐに海外での話を聞きたいというのでお会いしました。その折り、私は伊東の死を知ったのでしたが、その時の記憶はありません。しかし、翌年か二年後だったかに行われた追悼会については鮮明に記憶しています。伊東のかつての農民運動の同志から戦後生まれの学生たちまで、大勢集まりました。

埴谷雄高が伊東を偲び、今手元にある『遺稿と追憶』を発行する意思を込めて「運動の全史をつくろう」と呼びかけた様子が今でも思い起こされます。伊東を偲ぶ静かな思いの中にも人々の熱が籠った会合でした。

この『高たかく遠くの方へ 遺稿と追憶』(渋谷定輔、埴谷雄高、守屋典郎編 土筆社 1974)という遺稿集も実は友人でアナキズム研究家でもある手塚登士雄から借り受けたものです。度重なる引っ越しや

改築などで、この本もすでに私の手元を離れていて、彼からこの本を借りてこの拙文を書いています。

ちょうど600頁になるこの大著には、伊東のエスペラント原作詩や小論や手紙、友人知人の伊東を思う手記などがまだまだたくさん収録されています。

▶ 「馬鹿いっちゃいかん！」

1960年、反安保闘争が高揚し大きな大衆運動として盛り上がりました。全学連主流派を中心とする学生運動の渦の中に清水孝一はいました。1957年の高校2年生の時、伊東の『ザメンホフ』を読み、それ以降、エスペラント運動に入っていた彼は5月20日、岸信介率いる自民党の強行採決に抗議するデモ隊に入り、「首相官邸突入隊にまきこまれて、ヘイを乗り越えて中へ入ってしまった」と『遺稿集』で記しています。以下、清水の「今も私の心に生き続ける伊東先生」を文章に沿いながら伊東を偲びましょう。

清水は、半分気絶状態のまま、やっと逃げ出し、ある診療所のベッドに横たわっていました。その日の午後、約束の場所に現れない清水を心配した伊東はやっとのことで清水がいる場所を見つけました。以下、長くなりますが、清水の文章を紹介します。

——「先ほど、院長先生に会ったが、君は、バラ銭以外何も持っていなかったというが、まさか、意図的に、死を辞さないというような気で、突入したんではないのだろうね」

と、例の一語々々かみしめるような調子で、先生はゆっくりしゃべる。私はしばらくためらったのち、「はじめは、そんな気ではなかったんです。でも、もしかしたら、つかまるかもしれないという、懸念もあったから、定期や学生証などは、出るとき家に置いてきました。警官隊と

第十八回 多くの人たちに慕われた伊東三郎

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるい よしひろ)

やりあっているうちに、もう死んでもいい、と思うようになってたんです。その結果として、“機動隊、権力が、いかに残虐、非道であるか”が、国民大衆にはっきりわかってもらえるなら・・・と、無我夢中で・・・」といいかけた、その時、

「馬鹿いっちゃいかん！」

先生の口から、大声が発せられたのです。すでに、面会時間を過ぎ、周囲は、消灯して、静かになっていたので、その声は、共同部屋いっばいに、ビリビリと響き、あちこちで、スタンドの灯がついた。

「すまん、病院で大声なんか出して」——



それは清水が伊東との10年という付き合いの中で初めて見た、伊東の怒りの顔でした。

➤ 自己変革し続けた人格者

清水はその後、大手出版社の社員として編集者人生を送りました。その出版社が出す週刊誌の取材記者をしていた私はそこで清水と出会いました。私がエスペラントを齧っていると仲間から聞きつけた清水が私に電話をしてくれました。当時、清水は女性週刊誌の編集者でした。

その後、週刊誌記者を辞めた私は清水との交流も途絶えました。しかしエスペラントを再開してから清水との付き合いも復活しました。『遺稿集』で清水はこうも書いています。



——「清水君、いつまでも乳飲み児の気持ちでいちゃ、いかんよ」

という、先生のことばは、あれだけの活動をしてき、また、あれだけの齢でありながら、いつも、自己変革をし続ける全人格者のものとして、私にとって、父母はもちろんのこと、いかなる大学者、哲人のそれよりも、重く意味あるものとして、心の底深く沈殿している」——



私は伊東とは1年にも満たない、短い付き合いだったので、伊東への思いをこのように回想できる清

水は幸せ者だと思います。

➤ 「ウォーッ！」と奇声を発す

坂井松太郎というエスペランティストがいました。彼が遺稿集で伊東のことを「最後のエスペランティスト」と題して思い出を書いています。

それを読むと、1930年代の初めの頃、「伊東三郎は蔵原惟人と並んでプロレタリア文化運動の神様のような存在であった」と記しています。そしてまた、伊東が住んでいた玉川沿線の借家に訪ねたら、長谷川テルと劉仁がいた、とも書いています。しかし、坂井は「またどういうわけか、なんでもよく喋る伊東三郎だが、長谷川テルのこととなると、あまり話したことがない。それも勘繰れば気になることだが、今はすべて過去のこととして葬りさるより仕方がない」

ある人を偲ぶ10人ほどの集まりの中、私は坂井と隣り合わせになって言葉を交わしたことがあります。坂井は「エスペラントが、真に革命的な精神と、真に国際主義の精神を担いうるものとするならば、エスペラントを学びうるし、また学ばなければならぬ」という毛沢東を支持する人でもありました。当然にも当時の日本のエスペラント界の大勢には批判的だったと思います。そして私に、やんわりと伊東の著書『エスペラント』を観念論だと批判しました。

その坂井が遺稿集で伊東の面白いエピソードを紹介しています。

忘年会か新年会の酒席で伊東にも歌ってくれという声があがった時、伊東は「では、もっとも古い歌をうたおう」と座りなおし、ひとつ大きく息を吸いこんで「ウォーッ！」と奇声を発したので、みんな啞然としてしまった。伊東は「これは原始時代に、原始林のなかでわれわれの祖先が歌った歌だ」といったのでした。

戦前、獄中にいた時、ひどい拷問を受けた伊東は、音をあげるのは癪だし、黙ってじっと耐えているのはなかなか苦しい。そこで伊東は、「ウォーッ！」と叫んで、警察テロに対抗したというのだ、と坂井は記しています。

伊東三郎の面目躍如、と言ったところでしょうか。

東西文明の比較 (19)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

最近、「日本」が世界的に注目されています。なぜ今頃？と常々考えていましたが、ようやくそのヒントが見つかりました。次の意見は、ハーバード大学卒で「日本」を研究しているパトリック・サングイネティ(ケンブリッジ大学大学院)の言葉です。

「私の専門は古代史ですが、古代史は何世紀にも渡って研究しつくされてきた学問ですから、1つの研究分野を掘り下げるという方法は限界にきています。ですから近年は、異文化との比較研究が盛んになってきているのです。ケンブリッジ大学の大学院では、

引き続き、日本について深く研究し、新たな文脈から古代史を研究していきたいと思っています」と。

独特の歴史文化を持つ「日本」は、比較文化の対象としてふさわしいとのこと。

以上は余談としておき、久しぶりで日本の歴史に戻りたいと思います。

日本の歴史が好きな方々にとって、「卑弥呼とは何者か」と「邪馬台国は何処にあったか」というテーマは、大いなるロマンを感じるのではないのでしょうか。文字のなかった当時の日本のことを「魏志倭人伝」(三国志の魏書東夷伝倭人の条)ほか、多くの中国の書物に描かれた事によって、私たちは「私たちの歴史」を知ることが出来ることを幸せに思います。

もっとも、その正確さにおいては、いささか疑問も有ります。それぞれの解釈があり、未だに結論が出ない事が多く、学術論争が続いていますがそこにロマンがあるのでしょうか。

卑弥呼とは何者か

従来、卑弥呼は神功皇后である、というのが一般的な推論でした。そこで別の推論をご紹介します。これはどこかの民放局の番組から得た説です。

それによると卑弥呼は「日女命(ヒメノミコト)」である。つまり「天照大神」のこと。卑弥呼は247年に亡くなっている。気象庁で調べると247年と248年に続けて日食があったという。卑弥呼の後を継いだ弟の代は世が乱れた。そして十三歳の台与がその後を継いだ。天岩戸神話にある乱暴者の「須佐之男命」の行状を見かねた天照大神は、岩穴に隠れ(247年)、翌年に台与が後を継いだ(248年)が史実ではないか。

卑弥呼は魏の皇帝から「親魏倭王」に任ぜられています。なぜ魏は、文化的には遅れていた倭の女王を、朝鮮半島の韓族の国々の首長より優遇したのでしょうか。そこには「遠交近攻」の策がありました。魏は倭と結んで呉を挟撃しようとしていたのです(この時代、倭の国はもっと南に位置していると考えられていた)。卑弥呼が狗奴国(邪馬台国の南に隣接した国)の卑弥弓呼(男王)との戦いで苦戦している折には、魏王は帯方郡の塞曹掾史(守備隊長)の張政を派遣して支援しました。

その張政は、その後も倭に滞在して卑弥呼が没した後の混乱を見守り、台与の代になり秩序の回復を見届けてから帯方郡に帰っています。余談ですが…三国志では魏によって滅ぼされた蜀のファンですが、卑弥呼を支援した魏には感謝! です。

仏教の伝来

7月号では、渡来人によってもたらされた様々な文化を述べました。それらの中で、精神的に最大なものは「仏教」伝来ではないでしょうか。ご承知のように、インドで起った仏教の一派は、大乘仏教として中央アジアを経由して、紀元1世紀ごろに中国へ伝えられました。中国では4～5世紀に定着し、その後朝鮮半島に伝わり、多くの渡来人によって個別に伝えられていたようですが(日常生活を通じて)、公式には538年に百済の聖王によって倭に伝えられたといわれています。また、同時期には儒教や道教も仏教と混交しながら日本列島に流れ込んできました。

このあたりから、私が最大の関心を持つ「日本人の特性」と関わりを持つ事象が始まります。ここで私

が述べる「日本人の特性」を端的に言えば、「何でも採り入れて消化し、日本固有の文化にする」ということです。

「記紀」などに述べられている日本古来の「自然崇拜」を元とする「カミ」と外来の宗教などの精神文化がどう関わり、今日の日本人の「宗教観」になってきたのか、現代の世界でも宗教対立・民族対立が争いの「火だね」になっています。日本の歴史から得た教訓が少しでも、「平和の糧」になればと、念じていますが…。

倭・大和・日本

邪馬台国は、台与を女王にいただき、九州から畿内へ東遷したという説があります。遺跡の発掘成果にもとづけば2世紀前半までは九州の文化が先進的であるのに対して、2世紀後半になると、いわゆる畿内(ヤマト)の文化的要素が強くなるという事実があります。

畿内のヤマトは、古事記では「山跡・夜麻登」、日本書紀では「野麻登・夜麻苔・椰麼等」、万葉集では「山跡・山常・也麻等・夜麻登」などと書かれています。しかし、多くの古文献でヤマトは「倭・大倭」が使われています。古代中国の文献からの影響があったのでしょうか。

大和はいつ頃登場したのでしょうか。時代は進み、養老2年(718)に「大宝令」を改修してできた「養老令」に初めて登場します。

「日本」についてはどうか。古代では国号の「日本」と民族としての「日本人」は別個の問題でした。779年、奈良時代の朝鮮の歴史書「三国史記(新羅・高句麗・百濟)」によれば、国名は「日本」、朝廷の人々や種族名は「倭人」と記されていたようです。

中国の史書「旧唐書」には日本の由来について三説を記しています。

- ①「本国は倭国の別種なり。その国、日辺にあるを以て、故に日本を以て名と為す」
 - ②「自らその名の雅ならざるを悪み、改めて日本と為す」
 - ③「日本は旧小国、倭国の地を併す」
- また、中国史上唯一の女帝なのであった則天武后が

「倭国を改めて日本にした」と、唐代の書物「史記正義」にあります。

聖徳太子が隋の煬帝に贈ったとされる「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す…」を考えると、中国から与えられた「倭」でなく「日の本(ひのもと)」をつくり出した日本人は、前述した「日本人の特性」を如実に表した例だと思えます。また、中国王朝によって冊封^注された国が勝手に国名を変える事は許されませんが、冊封を拒んで、新国名を「日本」に改めたことは叡智だったと言えます。

災害や自然とのつきあい

「日本人の特性」で思い起こすことに、「災害や自然とのつきあいかた」があります。遙か昔の縄文人は、彼らを取り巻く自然と上手に付き合っていました。これを「自然との共生」と呼びますが、渡来人によって持ち込まれた弥生文化はどうだったでしょうか。

戦うこと、争うことを知っていた渡来人は、大地や自然の猛威とも果敢に対決しました。その相手は、水害・干ばつ・地震・台風・火災・獣害や病原菌などです。弥生人は、居住地や水田開拓を積極化しました。それを阻害する災害に抵抗することは当然と考えました。そうして灌漑施設をつくり、丘陵末端の谷や丘陵の縁など、地形に応じた給排水、水田の管理と適正規模を保つもので、技術的にも一定の発達を遂げました。そこには明らかに「自然と対峙」する姿があります。しかし、それにも限度が必要です。

周辺を見渡せば、近・現代の科学技術の発達は、いわゆる「自然を克服する」という西欧流の発想によるものです。さも目前に迫っているようなマスクミによる自動運転の「くるま」や「EV(電気自動車)」報道には、「自然をねじ伏せる」かの如き印象を覚えます。一方で、高齢者による「逆走」や「アクセル・ブレーキの踏み間違い」事故報道を見ると、「日本人の特性」を生かした予防する方法がないものか、真剣に考える昨今です。

■注

冊封：周辺の小国が歴代王朝に朝貢して主従関係を結び安堵してもらう。この制度は清朝まで続いた。日本では足利義満の時代を除けば冊封を受けていない。

第2章 高鳳蓮初期の剪紙

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

高鳳蓮の初期の作品とは、20世紀80年代中頃から90年代初め頃までに制作された作品を指します。この時期の作品は、単純な題材を写実的に、しかも誇張して表現していますが、画面は素朴で、内容的には人間的な味わいに満ちていて、'生活'と'自然'に密着しています。形式にとらわれず、伸び伸びとして、思うが儘、何の苦も無く切り出しているようです。親しみやすく、優しい作品が多く、人を引き付ける魅力があり、彼女の人柄がにじみ出ています。

初期の頃、高鳳蓮は、十二支を主題としたものを多く制作しています。彼女の動物は形にとらわれず、思い切った構図なのですが、良く特徴をとらえて生き生きとしています。例えば、午年に制作した馬の作品は、四肢を伸ばして疾走する馬、大股で空を駆ける馬、威風堂々とした馬など、どれをとっても見る人の心を浮き立たせてくれるものばかりです。

高鳳蓮の作品には、四角い紙に、模様がいっぱい広がった形式のものが多くあります。折りたたんで剪る時、同じ模様連続の中に、切り抜かれた部分が、放射する光のような効果を上げ、古代の壁画のような雰囲気を見せることもありま



意気盛んな高鳳蓮(2002年)

す。おさげ髪の少女や手を繋ぐ少女などは、特に連結の面白さを意識して切り出しますが、広げてみると、面白い雰囲気の商品が出来上がります。この種の剪紙には名前があって、多くは奇数で繰り返され、「三連は通常、五連は腕白坊主、七連は先祖の祭祀、九連は神々の祭祀」と言われます。

神仏祭祀用の剪紙に対する、高鳳蓮の気持ちは敬虔なもので、日常の中でそれらの剪紙を気軽に剪ることとはなく、勿論販売するために制作することはありません。但し頼まれれば、快く引き受け、祭祀の現場で制作をします。若し近所に病気の子供がでたり、或いは先祖の霊を慰める行事があったりすると、人々は、高鳳蓮に剪紙の制作を頼み、彼女も進んで引き受けるのでした。彼女は真剣に、「こういうものは、気軽な気持ちで引き受けてはいけないのですよ」と話します。その意味は、「祭祀用の剪紙は、神仏に対する敬虔な気持ちを持って制作するもので、関係のない処にやたらに並べては、剪紙に込められた威厳が損なわれます」ということです。

陝北の農村は、剪紙を「窓花」と呼びます。そして、それは大よそ三種類に分類できます。第一



三人の手をつなぐ少女

の種類は、農家の女性たちが手の空いた時に、草や花・動物などを剪り出して、単調な窑洞の入り口や窓に貼り、各家の特色を出して、単調な黄土高原に彩を添えます。第二の種類は、衣服や靴など刺繍の下絵とするために剪られるもので、これも又、色彩に乏しい黄土高原の生活に、華やかさと潤いをもたらします。

第三の種類は、信仰や祭祀にまつわる、宗教的意味合いがあるものです。それらは近くの家の子供の病気快癒を願ったり、厄除けを祈り、被災を慰めるなど、人々の生活に密着したもので干支の剪紙もそれらに属し、毎年、その年の干支に属する人への贈り物としてとても喜ばれます。高鳳蓮のこの時期の作品は皆、この「窓花」と呼ばれるジャンルに属します。

年月は休むことなく歩を運び、数十年の苦勞の果てに、高鳳蓮は子供たちを立派に育て上げ、姑も見送りました。三人の男の子は皆、街に出て、安定した公務員の職に就きました。これは、村ではこれまであり得なかったことで、村人たちの羨望的になりました。村人たちは、白家の墓地の風水が良いからに違いないと話合っていました。三人の女の子も、然るべき家に嫁がせて、安定して落ち着いた生活をさせることが出来、何人もの孫にも恵まれました。これで、高鳳蓮の心境にもゆとりが生じ、経済的にも恵まれて来たので、再び昔のような苦勞をすることはなくなりました。



のんびりと心休まるひと時

娘たちの婚家の人々とも交流し、娘たちはしょっちゅう実家を訪れるので、心楽しい日々が続きました。ところが1984年、思いがけず、高鳳蓮は、今までの幸運が全て消えてしまったと思えるほどの心が潰れるような出来事に遭遇しました。

1984年、突然の悲劇が高鳳蓮の身に降りかかって来ました。この年、彼女の二番目の娘が長女を出産しました。が、出産後、直ぐに次の子供を妊娠しました。出産予定は翌年の初めだったのですが、思いがけず出産が早まり、しかも難産でした。へその緒が胎児に絡まり、どうにか分娩はしたのですが、産後の大出血が起きてしまいました。周りの人々はなす術もなく時間ばかりが過ぎて、その出血のために次女は亡くなってしまいました。衛生知識の乏しい当時の農村では珍しくないことですが、享年二十歳でした。

此の辺りでは、昔から自宅の窑洞で出産するのは当たり前のことで、此の次女のように難産で大出血が起こり、命を落とすケースが比較的多いのです。高鳳蓮は、知らせを聞くと、気が動転し一瞬よろめきましたが、気を取り直し、向い側の丘にある娘の家に駆け付けました。5里の道をいつもの半分の時間で走りましたが、臨終には間に合いませんでした。

高鳳蓮は、陝北の全ての女性同様、母性愛の強い人で、子供たちは夫婦の授かりものであり、子孫につなぐ命と考えています。特に女の子を



次女の家は向かい側の山の上、五里(約2.5km)の道のりです

守るのは母親の当然の義務と考えています。今回の次女の出産に際しても、自宅での出産が終わったら、産後の世話（中国では、産婦は一か月何もしないでゆっくり休み、身の回りの世話を受けるのが普通）をしてやろうと思っていましたが、思いがけない事態が起こってしまいました。彼女の悲しみは大変なもので、一夜のうちに白髪が急に増えてしまいました。

以前の苦しみには立派に立ち向かった高鳳蓮でしたが、今回の不幸は受け入れ難いものでした。これ以後、彼女はすっかり人が変わってしまいました。以前は、いつも勢いが良くて情熱にあふれた人でしたが、この後は口数が少なく、動作もゆっくりになり、他人と話すことも少なくなり、谷を隔てた反対側の村の柏の樹や炊事の煙などを眺めて、静かに座っているようになりました。心の中で、自分が駆け付けるのが遅れて、次女を死なせてしまったと言う自責の念にさいなまれていたのです。

世の中で、子供に先立たれた親の苦しみ以上の苦しみはなく、高鳳蓮はこの陰鬱な気持ちにすっぽりと包まれてしまい、全てが空しく、生きる気力も失ってしまったようでした。この陰鬱な気持ちはそのまま次女の夫に向けられ、数年後に、この夫が再婚する時に彼女が孫娘を引き取りに行ってから、高鳳蓮と娘婿との間の交流は途絶え、全くの他人になってしまいました。此の気の強い女性は、生涯、娘婿を許さず、この時制作した剪紙作品が、彼女の気持ちをよくあらわしています（継母）【このページ上】。

1986年、県内では文化館が主催する剪紙の学習クラスが開催されました。高鳳蓮の子供たち

は、母親にこのクラスに参加して気を紛らわすようにと勧めました。高鳳蓮はこの剪紙の学習クラスで多くの虎の剪紙を制作しました。丁度寅年だ



継母

ったので、四角い剪紙の中に様々な虎が生み出されました。中の一枚は、よく見ると、虎の背中の上には何と、おさげ髪の少女が跨り、虎の腹の下には蓮の花のような雲が浮いているのです。

高鳳蓮は、亡くなった次女の冥福を祈りな

がら此の剪紙を制作し、次女が吉祥の虎にまたがり天国の楽園で楽しく過ごしなが、後から行く高鳳蓮を待っていて欲しいと願ったのです。これはごく普通の剪紙ですが、高鳳蓮の気持ちがこもり、人情味豊かで、見る人を感動させる作品となっています（「雲中奔虎」【このページ下】）。

高鳳蓮は、剪紙の制作という、心の平安を得る道を見つけました。この時期、高鳳蓮は干支を中心に、草花鳥獣・家畜猛獣を剪り出しました。午年に制作したものは、紙の上を疾駆している馬、口に靈芝（吉祥のキノコ）を銜えた馬、振り返って見つめる馬等々、皆力がみなぎり、勇気を与え



雲中奔虎



疾駆する馬

てくれるものばかりです。

構図は、四隅までしっかりと切りこまれ、陰陽のバランスが取れていて、安定感があり、見る人を心地よくしてくれます。陝北地方の馬はほとんどが農耕馬で、鞍を置いた馬の図は見かけません。しかし、高鳳蓮の馬の剪紙の中には、背中に鞍を置いたものがあります。これは彼女の少女時代、実家が豊かで乗馬用の馬が飼育されていた時の記憶に基



振り返る馬-2題

づいているのでしょう。鞍には刺繍が施され、楽しそうに山野を駆けまわっている仔馬の様子が見て取れる剪紙です。

1992年は申年で、高鳳蓮は多くのサルの剪紙を剪りました。が、それらサルは人間味があり、人間の子供の形かサルの形か区別が出来ません。元々、人とサルは近い関係に感じられている所為で、サルを擬人化した孫悟空のイメージは、抵抗なく人々に受け入れられています。

高鳳蓮も又、孫悟空の話を題材に剪紙を制作し、身体を搔くサル、飛び跳ねるサル、いたずら

好きなサル、西王母の蟠桃^{ぼんとう}を盗み食いで得意満面のサル等々が紙の上に剪り出されていて、見る人の口元が思わず緩んでしまいそうです。このページのサルは、生き生きとして可愛い子ザルのシリーズで、それぞれの作品には、いたずらっ子らしい子ザルの表情が表現されています。

^{てのひら} 掌 大の紙で、このような生き生きとした様子を表現するのは、高鳳蓮が最も得意とする処です。



サル-1



サル-2



サル-3



サル-4

フィリピンで2年間日本語教育に携わって

元ルソン大学日本語教師 為我井輝忠

これまで中国で2年間、スリランカで1年間そして最後にフィリピンで2年間の日本語教育を経験したが、どこの国でも貴重な体験をすることが出来た。今回はフィリピンに関して述べてみたい。

私は2014年11月から2016年11月までの2年間、フィリピンのルソン島(首都マニラのある島)で、前半はラウニオン州のサン・フェルナンドのTESDA(科学技術専門教育機関)で、後半はパンガシナン州のダグーパンにあるルソン大学(University of Luzon)で教えた。いずれも対象は全く日本語を専門としない学生たちで第二外国語として教えた。

フィリピンの教育制度は日本と異なり、6-4-4制で、小学校6年、中高等学校4年、大学4年となっている。義務教育は10年間で、その後の大学に入る年齢が日本と比べると、2歳も若い。そのため彼らを初めて見た時、大学生にしては幼い気がしたのはそのためであった。しかし、教育制度が数年後から変わるようで、日本と同じようになることになっている。

サン・フェルナンドのTESDAはすでに学校教育を終え、数年間働いた後再教育のために学ぶ高等専門学校で、全国各地にある。自動車や電気器

具、コンピューター等技術系の国の教育機関である。日本語教育は私が行って初めてスタートしたので、特別な方針は何もなく一切私に任された。そこで私はテキストを使わずに会話を中心に基本的なことを教えたが、アシスタントが常時授業の時はついていたので細かい点や文法的な説明は彼に全て任せた。学生は18歳から32歳までの15人で、すべて男性である。日本語のクラスは彼らの意思とは関係なく学校の方針で開始したため、あまりやる気がない学生もいた。授業は週3回あり、午前と午後2時間ずつあって彼らにはかなり苦痛であったに違いない。そこで日本のアニメや食べ物のスライドを見せたり、パーティを開くなど、様々な工夫をしてみた。日本語の能力を伸ばす面では大したことはあまり出来なかったが、多少でも日本のことに興味を持ってもらえればと思った。

後半はダグーパンという中規模程度の都市にあるルソン大学で教えた。この大学はカソリック系の私立大学で、学生数は5,000人を超えていた。小学校から中高校もあり、かなり大きな学園である。私は観光学部で教えた。将来、航空会社、ホテル、ビジネス関係の分野を目指す学生ばかりで、ほぼ全員日本語は初めてであり、中にはこれまで2年間学んできたという学生も数人いた。3クラスを教えた。1年生から3年生各学年一クラスずつで、1年生は



TESDAの学生やアシスタント(前列右から2人目)と共に



ルソン大学で日本語を学ぶ3年生の学生と共に



授業終了後日本語クラスの2年生と共に

16歳の学生が多く、前述のように一見、幼い感じがした。しかし、いざ授業中となるともう大人以上の意見を堂々と述べる姿をのぞかせていた。

授業では一クラス30人程の学生がおり、週2時間(一単位1時間)で限られた時間なので、ひらがなとカタカナに関してはほとんど触れなかった。テキストは「みんなの日本語」(英語版)を利用したが、あまり進まなかったことは確かである。むしろ彼らから要求の強かった日常会話や挨拶、観光、ビジネス事情を紹介する等、実用面を重視して教えた。フィリピンでは教師が学生に向けて一斉授業をする日本式のやり方は適当ではなく、むしろ一人一人に質問をしたり、考えさせたりする方法を進めた。学生は日本のことはおおむね知っていて、アニメやファッションなどは詳しい学生が多かった。

試験は、前期と後期にそれぞれ3回ずつあり、ペーパーテストと口頭試験の2種類で行った。試験をするのはそんなに問題ではなかったが、試験の結果と成績をコンピューターに入力するのが一苦勞であった。思っていた以上に事務的なことがコンピューター化されていて、とても一人ではできなかった。何度も教務の先生から教えてもらったが、幾度聞いても難しかった。そこで先にも述べたアシスタントに手伝ってもらわなければならなかった。手伝ってもらつと言うよりはほぼ全部やってもら

ったと言う方が適切かもしれない。

1年間の短い期間だったので、十分なことは出来なかったが、それでもルソン大学での仕事は充実し、楽しかった。それは学生が積極的に授業に参加してくれて、たくさんの質問やら時には脱線したりして、有意義な時間を学生と共有できたことにもよるだろう。

授業以外にも様々な面で学生や先生方との交流の機会があった。学内でのパーティ、新入生歓迎会、寿司弁当コンテストの審査員に招かれたり、また私のアパートで日本語パーティに学生を招いて3回開いた。この日本語パーティは先ずは日本語を話すのを目的とし、その上で日本料理(のり巻き)をみんなで作ったり、浴衣の着付け(知人の日本人女性に手伝ってもらった)をしたりして、大いに楽しむことが出来た。最後に、日本では経験できなかったことが一つあった。それは私の誕生日(10月14日)を学生たちに祝ってもらったことである。自宅での誕生パーティはもとより2回も近郊のビーチに繰り出して、みんなで祝ってくれたことである。こんなことは日本ではついぞ経験したことはなかった。

帰国して1年になる。再度、フィリピンで教えて欲しいという話がある。その折にはフィリピンの教育事情を更にしっかり見たいと思う。

料理講座 マレーシア料理は多国籍味 参加者：13名

2017年9月23日(祝) 麻生市民館・料理室

講師：ジェイソン プア (桜美林大学留学生)

講師を務めてくださったジェイソンさんは、マレーシアからの留学生で桜美林大学4年生だ。が、なんと昨年9月より桜美林大学の交換留学生として1年間韓国へ留学し、大学3年生の単位を韓国で終了して日本に戻ったところだった。

2014年11月、町田国際交流センター主催の「留学生トークプラザ」に参加した折、マレーシアの紹介をされたジェイソンさんを知った。パソコンのパワーポイントを使ってマレーシアという国を短時間で的確に紹介していた。振り返ってみるとまだ留学してきたばかりの頃ではなかったか。

その折に、会が企画していた留学生向けの日本料理の会へお誘いした。積極的な若者で自分の友人を誘って来られ、参加の留学生たちに「連絡し合って交流し、一緒に活動しよう」と呼びかけていた。そのようなジェイソンさんの姿に‘わりい’との接点を感じた。

‘わりい’の活動へお誘いしたり、昨年韓国留学へ行く前には、スパイス手作りのマレーシア風チ

キンカレーの講師をお願いしたりでジェイソンさんとの交流が深まっている。

東のインドと西の中国を結ぶ「マラッカ海峡」は有史以前から東西の民族が行き交った重要な海の大動脈として知られ、マレーシアの西側はこのマラッカ海峡に面し様々な文化を吸収し育ててきた。華人系文化はプラナカン文化と呼ばれ、その中で他の民族との混血による華人はババ(男)・ニョニャ(女)といい、両者の混ざり合った文化をババニョニャ文化と呼ぶのだそうだ。

さて、講習会のメニューは、マレーシアのババ・ニョニャ料理の代表格の「海南鶏飯」をメインに、日本のおでんに似通った「^{ヨントウフ}醸豆腐」風スープ、パンダンの葉で色付けしたクレープ「オンデオンデ」とコーヒーのデザート。

「海南鶏飯」は一口で言えば丸ごと鶏の炊き込みご飯で、きちんとしたレストランばかりでなく屋台などでも食べられるし、それぞれの家庭料理としても料理される、いわばマレーシアのソールフードといえる。

今回は、講習会なので切り分けやすいように鶏のもも肉を使った。よく洗って、調味料にしばらく漬け置きした鶏肉を大鍋で茹でるのだが、びっくりしたのはしばらく茹でた鶏肉を取出し、いきなり氷水に漬けてザブザ



写真上：ランチ風景(正面右がジェイソンさん)

写真中：マレーシア風クレープ・オンデオンデ 美しい緑とパンダンの香りがそそる。

左写真：海南鶏飯のセット マレーシア独特のソースをかけて頂く。にんにく、生姜、生赤唐辛子を超みじん切りに、ライムのしぼり汁と醤油を加え、更に鶏茹で汁の油を加える。

ぶ洗った。鶏肉の臭みを取る作業で、鶏肉の大きさによってこの作業を何回か繰り返すのだそうだ。ご飯は、生姜やニンニクなどの香味野菜といためた米にこの鶏の茹で汁で炊く。

デザート「オンデオンデ」は色も鮮やかな若葉色で見ると南方風だが、包まれた餡は、ココナッ

ツファインにココナッツシュガーをからませたもの。クレープは市販のホットケーキの素を使ったが、焼き立てよし、冷めてもよし、冷凍もできる。パンダンの葉の香りにココナッツ風味が合わさって口の中に南国の味が広がった。

(報告：田井光枝)

中国の笑い話 34 (「365夜笑話」より)

翻訳：有為楠君代

第112話：占星術

ある日、何人もの外国の友人に向かって、男が言いました。

男「やあ、皆さん！あなたたちの国の気候と我々の国の気候は同じですよ」

外国人の一人が訊きました。

外国人「私の国とこの国は、何千キロも離れているんですよ。どうして気候が同じだということですか？」

男「私は、星の様子を見て言っているのです。あなたたちの国の星々も、この国の星々も、同様に多くて、同様に綺麗です。きっと気候も同じですよ」

第113話：糖

先生「さあ、“糖”の字を使って文を作りなさい。必ず“糖”の字を入れなさい」

生徒「父が家でお茶を飲みます」

先生「“糖”の字が入ってないね」

生徒「お茶の中に入っています」

第114話：どこへ探しに行くのか？

先生「唐代の大詩人・白居易は、詩を作ると、必ず村のおばあさん達に聞いて貰いました。皆さんも作品を作ったら白居易に倣うと良いですね」

学生「でも、どこへ行けばそのおばあさん達に会えますか？ そのおばあさん達は千何百年も前に死んでしまっているんでしょう？」

第115話：先生の批評を読む

学生が作文ノートに、先生が書いた批評を読もうとしましたが、書かれた文字が読めませんでした。先生のところへ行って訊きました。

学生「先生、先生が書いてくださったのが読めません」

先生は、眉を寄せて自分が書いた文を長い間じっと眺めていましたが、やっと読み上げました。先生「字の書き方がぞんざいだ。これからはもっと丁寧に書くように」

第116話：反証

先生「“特長”とはどんな意味か、説明できるかね？」

学生「“特長”とは、特別な長所のことです。」

先生「では、それを使った短文が作れるかね？」

学生「ハイ、出来ます。或る人は、髪の毛が特別長いことを除けば、別の特長は何もない！」

第117話：別の一頭の牛

先生「名詞と言うのは、人や物の名前を指す言葉です。誰か名詞の例を挙げてごらん」

カシム「一頭の牛」

先生「よくできたね。もう一つ上げてごらん」

カシム「別の一頭の牛」

先生「まだあるかね？」

カシム「もう一頭、別の牛！」

第118話：抽象名詞

先生「抽象名詞とは何かね、アンナ？」

アンナ「私、分かりません。」

先生「抽象名詞というのはね、考えられるけれど触ることが出来ない物を表すんだ。分ったかい？」

アンナ「分かりました」

先生「では、例を挙げてごらん」

アンナ「真っ赤に焼けた火箸です」

‘わんりい’代表就任のご挨拶

寺西 俊英

この度の特別定例会において、皆さまからご推挙いただき ‘わんりい’ 代表を引き継ぐことになりました。まずは25年の長きに亘り、‘わんりい’ 代表を務めてこられた田井前代表に心から敬意を表します。卓抜した指導力と包容力で本会をリードされ今日に至ったことは会員の皆さまも同様に感じられていることと存じます。

私が ‘わんりい’ と関わりを持ちましたのは、2009年7月に郁先生の中国語教室で、田井前代表と今後私と共に副代表を務めてくださる有為楠さんと知り合った時からです。その後入会しましたが、会員となってまだ8年しか経っておりません。経験豊富で多士済々な方々ばかりの中で代表をお引き受けしたものの、どうして私が？ と戸惑っております。‘わんりい’ の活動に関わる皆さんが思い切って若返りを図ろうとした、と思うしかありません。若いとは言っても私はこの度の定例会の時点で「古稀」でした。昭和21年の広島生まれです。（余談ですが親の代からの熱烈な広島カープファンです。）

18歳の時東京に出て来て、学生時代を過ごしそして会社員となり数回地方転勤は有りましたが、基本的には東京での生活が長く続きました。ところが会社勤めの最後に社長に呼ばれ、2007年に中国・大連勤務を命ぜられました。その時は驚きましたが、そのおかげで多くの中国人の友人ができ、また片言の中国語が話せるようになりました。2年後帰国した後、中国語を忘れないようにと思い ‘わんりい’ 中国語勉強会（郁講師）の教室に入ったというわけです。これも有縁千里来相会でしょうか？

さて、会の今後につきまして、これまでの柱となる活動を継続することは勿論ですが、いろいろな活動の場でアイデアやアドバイスを率直にお聞かせいただけたらと思います。会則第3条の目的に沿って新しい形が生み出せればと思います。また活動は人が集まることから始まります。主として当面の活動を話し合う場である「定例会」にお気軽に参加していただくことを心より望んでおります。



‘わんりい’代表交代にあたって

田井 光枝

突然のように思われるかもですが11月より ‘わんりい’ 代表が寺西俊英さんに交代します。私自身の健康状態は幸い悪くないものの、2年前に80歳になり、‘わんりい’ の今後のことを考えて、そろそろというか本気で代表をどなたかに引き継いで頂く事を定例会などで折々話し合ってきました。

活動が始まって、今年8月で満25年になりました。会則で代表の任期は2年と決めながら、‘再任を妨げず’ の条文を好いことに、代表であり続け、言葉で語りきれない多くの楽しみを ‘わんりい’ の活動から貰ってきました。中国だけではなくアジ

ア各国から来日の皆様との交流は、活字や映像を通してではない、直に、未知の国々を知る喜びであると共に、マンネリに落ち入りやすい日々の生活の刺激剤でした。また、‘わんりい’ 会員をはじめ、会をサポートくださる多数の同好の、そして寛大な多士済済に恵まれ、振り返っても嫌な記憶がまるでない、なんと幸せな歳月だったことかと改めて思っております。

新代表を引き受けてくださいました寺西さんが就任の挨拶の中で書かれましたように、会の活動は、人が集まる事から始まります。

‘わんりい’ はNPO資格も取らないまま市井の市民活動として終始してきました。が、にも拘らず多

方面からの多くのご支援や、会員各位の協力によって多彩な活動を続けてきました。その活動の源を掘り下げれば、なんととっても、会に関わる皆様の視野の広さ、未知への好奇心と異文化への興味、そして、即実行の行動力によるといえるでしょう。また、「わんりい」の皆さんの中には専門的な知識をお持ちの方も多数いらっしゃいます。

今後「わんりい」の活動がなお一層楽しいものになるように、それぞれが持てるものを、是非、活動に反映して頂きたいと願っています。定例会は会員すべての方に開かれています。ご参加くださるのもよし、メールその他でご意見を伝えて下さるのもよしです。遠慮は無用。叱咤激励、ご鞭撻何でもありで、寺西代表と「わんりい」事務局の皆様を是非サポートくださいますようにと願っています。

絵本でちょっとワンプレイク

「なくなりそうな世界のことは」

吉岡 乾 著 / 西 淑 イラスト (創元社刊)

9月のある日、友人との待ち合わせ時間にゆとりがあったので、文庫本でも買おうかと久し振りに新宿小田急デパート10階の三省堂に行った。本の並べ方が以前と異なり、著者名毎に単行本も文庫本も一緒に纏められていた。

ゆっくり本を選ぶ楽しみを味わいに行ったわけではなし、この著者の、この本をというはっきりした目的もなく、漠然と何か手軽で面白い本でも探そうと思って立ち寄っただけなので少々困惑しながら書棚の間をうろうろしていると絵本が並んでいるコーナーがあった。

昔から絵本が好きで、かつては良く本屋に立ち寄って楽しげな挿絵の絵本に出会うと嬉しくなり、あまり中身を吟味せずいそいそと買っていたが、私が乗り降りする小田急線の鶴川駅前に図書館ができた。そこで本を調達することが多くなって本屋に立ち寄ることから縁遠くなり絵本売り場を覗くことが少なくなった。が、この日、私の目に飛び込んできたのは



「なくなりそうな世界のことは」という絵本だった。

世界には「7000の言語があって、今、メディアやネット、科学技術の発展と共に『小さな』ことは担い手を失ってどんどんなくなってきている(絵本の前書きより)」のだそうだ。卑近な例でいうと、アイヌ民族は10万人ほどいても「アイヌ語」の話者数は5人とのこと。

「なくなりそうな世界のことは」絵本は、世界から消えかかっている言語の中から、たったの一語を選んで、その言葉がイメージする挿絵とその言葉の味わいを伝える。

著者は国立民族学博物館助教の吉岡 乾^{のぼる}先生だが、選ばれた50民族の、それぞれの一語はその言語の研究者たちが思い思いの視点で選んだそうだ。言葉のイメージを描いた絵は、消えてゆく言葉(そして民族も)への優しさが感じられる色合いで心地良い。

今夜は「マンパー」(よい夢を!)(ティディム・チン語/ミャンマー、インド)と言って寝ようか。

(田井光枝)

初心者のための体験のお誘い 【鶴川水墨画教室】

- 講師：満柏（日中水墨協会・会長）
- 場所：鶴川市民センター
（町田市大蔵町1981 駐車場有）
小田急線鶴川駅からバス
「鶴川市民センター入口」下車
- 曜日・時間：14:00～16:00
毎月第2、第4（月）
- 体験参加費：1000円
（見学無料/手ぶらで参加可）
- 問合せ：野島
☎042-735-6135



葡萄 満柏画

■満柏プロフィール

1965年、中国の遼寧省生。祖父、母親は共に中国の著名な画家。中国の美術大学を卒業後、1988年、来日。日本の大学に入学し、日本文化思想など学ぶ。1996年から1999年、横浜市林光寺の天井画と障壁画を描く。1996年中国水墨画で「日本の自然を描く」展を開催。個展及びグループ展開催多数。水墨画・書の傍ら、美学芸術論を研究し、独自の美学論芸術論を唱えている。

- 日中水墨協会会長 ■ 中国水墨芸術家連盟常務理事
- 全日中展審査員 ■ 東京中国書画院常務理事 ■ 日本華僑華人文学芸術家連合会理事 ■ 「水墨之友」編集委員 ■ 美術大学非常勤講師。

町田国際交流センターの催し

第15回留学生トークプラザ

町田市内及び近隣の大学で勉強中の留学生たちの素晴らしい日本語と、鋭い日本観察と主張を聞いてみよう！

- 開催日時：2017年11月12日（日）
- 開催時間：14:00～17:00（開場13:30）
- 会場：町田市立中央図書館 6Fホール
東京都町田市原町田3-2-9、JR横浜線町田駅東口、徒歩2分、小田急線町田駅徒歩10分
- 参加無料（定員60人申し込み順）
- 申込み方法：FAXで、住所・氏名・参加人数と電話番号を町田国際交流センター「留学生トークプラザ」係へ
（FAX 042-722-5330）

- ◆ 問合せ：町田国際交流センター
☎042-722-4260
（8:30～17:15日・祝除く）



◆わんりいの講座

中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

- ▲ まちだ中央公民館 10:00～11:30
11月26日（日）学習室1
12月10日（日）第3学習室

- ▲ 講師：植田渥雄先生
（桜美林大学名誉教授、
現桜美林大学孔子学院講師）



- ▲ 会費：1500円（会場使用料・講師謝礼など）
- ▲ 定員：20名（原則として）
* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。

- ◆ 申込み：☎090-1425-0472（寺西）
E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp（有為楠）

◆わんりいの講座

ボイストレーニングをして 日本の歌を美しく歌おう！

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

- 11月21日（火）10:00～11:30
- 12月19日（火）10:00～11:30
共にまちだ中央公民館 視聴覚室
★動きやすい服装でご参加ください



- 講師：Emme（歌手）
- 会費：1500円（会場使用料・講師謝礼など）
- 定員：15名（原則として）

- ◆ 申込み：☎042-735-7187（鈴木）
E-mail:wanni@jcom.home.ne.jp（わんりい）

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。各位からいつもたくさんの切手をお届け頂いて感謝申し上げます。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでに折に田井にお渡し下さい。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽に寄せ下さい。又会の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりい’に掲載の記事などについても、ご感想をお待ちしています。

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’

‘わんりい’も参加! 町田市民のお祭り

入場無料

第11回 市民協働フェスティバル「まちカフェ!」

町田市内で活動するNPO法人や市民活動団体、地域活動団体(町内会・自治会)が一堂に集う!! さあ、活動を発表して交流を深めよう!! 皆さん、是非、覗きに行こう!!!

- 2017年12月3日(日) 10:00～16:00
- 町田市役所・全館(〒194-8520 東京都町田市森野2-2-22) ☎042-722-3111(代表)



小田急線町田駅西口から徒歩約8分、JR横浜線町田駅中央口・小田急線連絡口から徒歩約11分

- ‘わんりい’の会は、下記で参加します
- ①ラオス山の民・モン族の手の込んだ刺繍小物を販売
 - ②‘わんりい’誌に掲載中の、日中水墨協会・会長・満柏画伯による水墨画の体験

水墨画の年賀状に挑戦は如何?

- 申込みはなくとも大丈夫!
- 紙、筆、などの持ち物不要です。
- 体験時間帯

11:00～12:30と、14:00～15:30

問合せ: ☎042-734-5100 ‘わんりい’



曹雪晶リサイタル 二胡アフタヌーンコンサート

江河水/葡萄熟了/チャルダッシュ/讚美歌第2篇219番/落葉松など演奏多数

- 12月6日(水) 14:00開演(13:30開場) ● チケット: 3500円(全席自由席)
- ルーテル市ヶ谷・ホール 新宿区市ヶ谷砂土原1丁目1 ☎03-3260-8621
※東京メトロ(有楽町・南北線)市ヶ谷駅下車、徒歩約1分/都営新宿線市ヶ谷駅下車、徒歩7分
- チケット申込み: オフィス和弦 ☎090-8775-7981



日本中国友好写真協会第1回 公募写真展
第9回ゲーサンメド写真展

中国大陸に行く

入場無料

日中両国民の相互理解と友情を深め、多くの方たちに中国大陸の実情を知ってもらおう!

- 2017年12月15日(金)～12月21日(木)
(土日祝日休館) 10:30～17:30
(初日は15:30～ / 最終日は13:00)
- 富士フォトギャラリー銀座 <http://www.prolab-create.jp/gallery/ginza/>
(〒104-0061 東京都中央区銀座1-2-4サクセス銀座ファーストビル4F)

【主催】日本中国友好写真協会・NPO法人チベット高原初等教育・建設基金会ゲーサンメド

【問合せ】☎03-5912-1232 (烏里烏沙)

絶望の先に本当の希望があった 映画「世界で一番美しい村」 (ドキュメンタリー108分)

石川梵監督、ナレーション: 倍賞千恵子

ネパール大地震の震源地で写真家が出会ったのは愛と祈りと絆で結ばれた世界で一番美しい人々が住む村だった

- 2017年11月22日(水)
13:30～/18:30(開場はいずれも上映30分前)
- 和光大学ポプリホール鶴川 B2 ホール
(小田急線北口徒歩3分)
- チケット 700円(各回定員300名)
町田市民ホール 電話又は窓口で ☎042-728-4300
和光大学ポプリホール鶴川 窓口で

▲主催: 鶴川ショートムービーコンテスト実行委員会
一般財団法人 町田市文化・国際交流財団

【11月定例会開催日及び12月号おたより発送予定日】 ◆ 問合せ: ☎044-986-4195(わんりい)

- 11月の定例会: 11月12日(日)13:30～ 三輪センター・第三会議室
 - 12月号おたより発送日: 11月28日(火)10:30～ 場所: 三輪センター・第三会議室
- ※ おたより発送日はお弁当を持参ください。

世界の子供たちが描いた、表紙とも13枚多色刷りのとっても可愛い
カレンダー、各自で申し込まれる方はまだ間に合います

(公財) 日本国際連合協会 **世界児童画カレンダー 2018**
(B3サイズ/36.4×51.5cm)

第19回カナガワビエンナーレ国際児童画展に応募の24,573点の入選作品の
中から選ばれた国際色豊かな児童画

1部 1080円(税込・送料1本300円)

▲(公財)日本国連協会へ直接お申し込みください。 ☎03-622-6831



エレナ・ドブレヴァ 6歳 ブルガリア

お散歩しよう アートで彩るせたがやの秋 京劇の「新潮劇院」参加
世田谷区制85周年「世田谷芸術百華2017」

イタリア発祥の『オペラ』と「チャイニーズ・オペラ」とも呼ばれる中国の『京劇』。
双方の俳優をお招きし、その発声方法や様式を比較したり、「メンバーを入れ替
えてみたら どうなるか?」に挑戦してみます。

● **講師**：殷秋瑞(花臉[隈取]) / 張桂琴(刀馬旦[女性役]) / 大森麗(ソプラノ)
/ 金努(バリトン) / 岡田真歩(ピアノ)

● 2017年11月26日(日) 19:00開演(開場18:30)

● 梅丘パークホール(北沢区民会館別館) 小田急線「梅ヶ丘」徒歩4分
〒156-0043 東京都世田谷区松原6-4-1 ☎03-5300-3220

● ドリンク付き参加費：一般1,800円 学生/500 /未就学無料

◆ **問合せ**：☎080-4478-7009(衛藤) 新潮劇院/(一財)日本京劇振興協会



中国伝統芸能体験を通じ、子供たちの文化・国際意識と情操をはぐくむ

ヨコハマアートサイト2017参加事業 **「こども京劇プロジェクト in Yokohama」**

● 化粧体験:11月11日(土)13:30~15:00 ● 実技体験:11月18日(土)13:30~15:00

● 横浜山手中華学校(JR石川町) 対象:3歳以上 定員各回30名問合せ

◆ **問合せ**：☎080-3486-3352(梅木) 新潮劇院/(一財)日本京劇振興協

参加無料



‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。
ご継続をよろしくお願ひします。また、新入会をい
つでも歓迎します。途中入会の方には会費の割引があ
ります。お問い合わせください。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられまし
た。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力
し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流
を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。
入会されると、

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100(事務局)

◆ インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂い
た方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファ
イルでお送りします。こちらは無料です。

◆ 町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合
わせください。

‘わんりい’ 228号の主な目次

「寺子屋・四字成語」聞一知十(7)	2
論語断片(31)民は之に由らしむ可し	3
大連・鞍山・本溪の旅(その4)	4
混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義(18)	6
東西文明の比較(19)	8
黄土高原に咲く目にも彩なる花々Ⅲ	10
フィリピンで日本語教育に携わって	14
【料理の会・報告】マレーシア料理は多国籍味	16
中国の笑い話34	17
‘わんりい’代表就任の挨拶	18
‘わんりい’代表交代にあたって	18
絵本でちょっとワンブレイク	19
‘わんりい’掲示板	20・21・22